

## 『次世代への提言！』

2020年11月18日

日本クリスチャン・アカデミーが、次世代を担う神学生のために、出会いと共同の学びの機会としてのプログラムを立ち上げ、11名の講師による講演を『次世代への提言！ 神学生交流プログラム講演記録集』を編集、出版している。私は次世代を担う者ではなく、隠退した牧師であるが、書評を見て興味を引かれ、読んでみた。牧師、神父、聖書学者、実践神学者など、キリスト教界を代表する人々の講演は刺激的で、良い学びになった。講演は自分史と専門の研究の二部構成になっている。自分史は、生い立ち、精神的行き詰まり、肉体的弱さ、経済的困窮などを率直に語り、人は皆、同じような苦悩と迷いを背負って生きていることに親しみを感じた。そして、出会いによって学び、育てられるものであると語っている。ただ、講演者たちは、当然ながら、猛烈に勉強していることに敬服した。どの講演も印象深いので、3人の講演を、短く紹介し、私の感想を述べたい。

荒井献先生は、日本の新約学を飛躍的に高めた。新約学者や、牧師たちで、先生に学ばなかった人はいないだろう。先生は、ご自分の信仰を易しく下記のように語っている。「私にとって『信仰』とは、私を罪あるままに受け入れたイエスの十字架にあらわされた神の愛の受容であった。… 新約聖書を含む初期キリスト教諸文書の多様なイエス理解の背後に、次のようなイエスを見出した。— イエスの愛は元来、当時『罪人』として宗教的・社会的に差別されていた『不浄な民』に向けられており、その愛を社会のなかで貫徹して生き、その愛を拒否した宗教的・政治的支配者たちを激しく批判したために、十字架刑に処された。とすれば、私を罪あるまま受け入れた神の愛の受容（信仰）とそれへの応答（信仰生活）は、必然的にイエスが愛し、赦された『罪人』の位置に立ち、彼ら・彼女らとの共生へと促される。」罪あるまま受け入れられ、神の愛を知った者は、差別・抑圧された人々と命を分け合う生き方へと導かれる。教会はこのイエスの愛を追い求める群れである。

寄せ場と言われる釜ヶ崎で司牧しておられる本田哲郎神父は下記のように言われる。「相手の立場になる」という言葉を聞くが、相手の立場に立つことなどできない。立てないのなら、相手より下に立つしかない。理解するというのは、英語ではunderstand、下に立つという意味である。「教えてください」と学ぶ姿勢になる時、相手を尊敬する姿勢になる。ロマ書12章10節の「兄弟愛をもって互いに深く愛し、互いに相手を尊敬し」を「互いに仲間としての思いを大事にし、尊敬を込めて相手を自分の指導者と思いなさい」と訳している。自分には不可能な、「愛する」という言葉を「大切にすること」している。人の立場に立てず、愛に生きられないことを知って、下に立って、相手を大切にすることが、福音に生きることでありと力説される。牧師は「先生」と言われ、高い講壇から説教をする。徹底的な低みに立たれたイエスから学び、倣うことは宣教の命であろう。

戒能信生牧師は、日本キリスト教史を深く検証し、資料統計を読み解いて、実態を説明している。第二世代と言われる中田重治、山室軍平、賀川豊彦などによる民衆層への伝道の進展、また、戦後のキリスト教ブームもあった。しかし、クリスチャン人口が1%に達することはない。宣教不振は、教会は清潔倫理を強調したが、社会的・政治的責任をないがしろにしてきたからではないか。自己保身的な教会は、和解と贖いの言葉を人類にも世界にももたらすことはできない。カール・バルトが言う「世のためにある教会の使命を果たすこと」、また、ディートリッヒ・ボンフッファーが言う「祈ること、そして人々の間で正義を行うこと」を模索することが重要ではないかと提言している。